

## マルシリオ・フィチーノとプラトニック・ラブ

### グロワザール・ジョスラン

(訳=藤原真実)

性行為なしに体験される愛のことを、人はプラトニックな愛だと言う。しかし、純粋に精神的で性交渉のない愛を、古代ギリシアの哲学者プラトンの名前から派生する形容詞「プラトニック」で呼ぶのはなぜだろうか。プラトンが性愛を禁じたり軽視したりする理論を立てたのだろうか。そうではない。プラトンが愛の問題にささげた対話篇『饗宴』の中に、性愛の倫理学、あるいは反・性愛的な倫理学を述べた箇所を探しても無駄である。歴史的に、性愛を排斥する精神的な愛の哲学理論は、プラトンから約二千年後、ルネサンス期のイタリア人哲学者マルシリオ・フィチーノに遡るものとされている<sup>1</sup>。マルシリオ・フィチーノは、プラトンおよび古代プラトン主義の哲学者らの翻訳者であり注釈者でもあったので、当然のように彼の愛の理論が「プラトン主義」の理論と見なされるようになった。したがって、「プラトニック」な愛とはむしろ「プラトン主義的」な愛であるが、プラトン本来の哲学と、プラトン主義の流れをくむ哲学者らによって作り上げられた新たな理論との違いを強調するなら、「新プラトン主義的」な愛なのである。マルシリオ・フィチーノにおけるプラトニックな愛の観念を理解するためには、それをプラトン主義の伝統の中に位置づけ、連続する三つのプラトン主義——まずプラトン自身によるもの、次に古代後期ギリシアの新プラトン主義、そして最後に十五世紀後半のフィレンツェで復活した新プラトン主義——により練り上げられた愛の哲学理論を検討する必要がある。

<sup>1</sup> J. Festugière, *La philosophie de l'amour de Marsile Ficin* [Études de philosophie médiévale, 31] パリ、1941年、特に30-31頁。

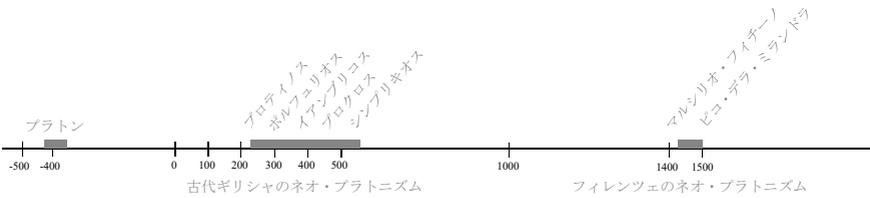


図1：三つのプラトン主義

## I. プラトン：真実への運動としての愛

プラトンの『饗宴』の中には、肉体的な愛より精神的な愛を優位に置くものとして解釈されがちな有名なエピソードがある<sup>2</sup>。かなり滑稽なその話を語るのは、紀元前五世紀末のアテナイで最も美しく最も優秀な青年アルキビアデスである。ソクラテスが自分の美貌に惚れているのを感じたアルキビアデスは、彼に身を任せようと決意し、二人きりで夕食をとって夜は泊まってもらおうと画策する。ところが、アルキビアデスがあらゆる機会を与えているにもかかわらず、ソクラテスは何もしようとしない。しまいにはアルキビアデスはソクラテスの寝床にもぐり込むが、それでも何も起こらない！アルキビアデスは並外れた美貌にもかかわらず無視されたのだから、そんな話を語るには、ひどい屈辱を受けた恥ずかしさ乗り越え、よほど自嘲したところを示さなければならない。若い男が年上の求愛者に激しく言い寄られて言いなりになるという普通の物語とは正反対に、ソクラテスに身を任せようとしたアルキビアデスは、自分の方から彼を誘惑するはめになり、しかもそれが失敗に終わったのだから。

一見したところ、この物語は、肉体的な愛は下等だから、ソクラテスがしたように、性愛を浄化した愛によって乗り越えられねばならない、と言っているように思われる。しかしながら、この逸話の本質はソクラテスの自制にある。一方でソクラテスは実際にアルキビアデスを愛しており、それゆえ肉体美に無関心どころではない。他方でソクラテスが彼を性的に愛することを妨げるものは何もない。アルキビアデスが抵抗しているわけでもなく、一般的な性行為や特殊な同性愛についての社会的タブーもない。それだけになおさらソクラテスの自己抑制は大きいのだ。道徳

<sup>2</sup> プラトン『饗宴』216d-219e.

というものが、一定の社会の価値に応じて良いとか悪いとか見なされる行動のシステムであるなら、ソクラテスはアルキビアデスと寝るべきである。この若者は美しいからである。古代ギリシア文化において、美は至高の価値であり、徳と区別されない。立派な人について、その人は「美にして善」(*kalos kagathos*)と言われるが、この二つの資質は一つのものでしかなく、ただ一語のかばん語*kalokagathia*で言われる。また古代ギリシアにおいては、年長の求愛者が、彼に身を任せる年下の恋人を保護し教育するかぎりにおいて、女性に対する愛より男性同士の愛の方が社会的にはるかに高貴なものと考えられていた。したがって、アルキビアデスが語る逸話が肉体的美を低く評価し、性行為を背徳的なものとして排斥することを目的としているとは考えられない。それどころか、美しい身体への肉体的な愛は全く正当であるからこそ、ソクラテスの行為はすばらしいし、それゆえ称賛すべきなのである。

しかし、古代ギリシア文化において性愛にはなんら咎むべきことがないなら、ソクラテスはなぜアルキビアデスと寝るのを控えたのだろうか。なぜならプラトンの『饗宴』では、ソクラテスが愛の領域の達人として描かれている<sup>3</sup>からであり、身体への物質的な愛は初心者向きだからである。つまり性欲は愛の第一段階でしかなく、全体としての愛は、<sup>アナゴジック</sup>真実への神秘的な高揚の運動だからである。アナゴジックというギリシア語の本来の意味は、「高いところへと連れて行く」である。いかにして愛が真実への上昇の垂直な運動として理解され得るのかを理解するためには、この観念を、プラトン哲学、すなわちイデア理論の全体の文脈に置き直す必要がある。真実の理論であるこのイデア理論は、紀元前五世紀ギリシアの重大な政治的過程、すなわち民主制の誕生の文脈の中でしか理解されない。階級システムにおいては、真実は上位にある者、すなわち権力により真実を他の者たちに押しつけられる者のものである。しかし、市民が平等であり同等の力を持つ民主的システムにおいては、真実を他の者たちに押しつけることはできない。反対に、彼らから認められるようであればならない。そのため、自分が真実だと信じることを言い表せるようになることが重要になる。だからこそ、民主制が創始されると、それに付随して合理的言説 (*logos*)、すなわち他者の自由な同意を獲得することを目的とする議論のテクニックが発達するのである。

<sup>3</sup> たとえば同書、177d-e, 198d.

しかしながら、そうしたことばの技術はたちまち二つの逆の方向へと向かい、一方では修辞学を、他方では哲学を誕生させることになる。修辞学は、市民が平等に

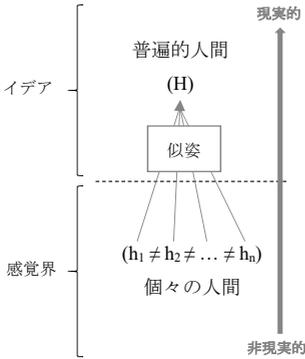


図2：人間のイデア

なることで失われる権力関係を、ことばの中で再現することをめざす。民主制において権力を持つのは、巧みに話して他の人々を説得できる者であり、どんな話をしようが、間違っただけを言おうが、大したことではない。大切なのは納得させることなのだ。修辞学は演説の技術であり、それゆえ独白であるのに対して、哲学は討論の技術である。プラトンの全著作は対話であり、その中でソクラテスは他の人々と議論をして真実を探求する。まさしく「対話dialogue」の中でなされるので「弁証法dialectique」と呼ばれるこの探求方法は、我々を取り巻く個別的な現実から、普遍的でより高次の現実へと遡ることに存する。たとえば、我々には周囲にある個々の人間が見えるが、人間の真の本性、すなわち万人が共有するものは見えていない。我々にできるのは、思考によってそれを捉えようとするだけでしかない。この普遍的人間が、人間のイデアである。つまり、そのかりそめの似姿、あるいは鏡に映った影のようなものでしかないあらゆる個別的人間を超える永遠の実在である。哲学史において、プラトンのイデア論は観念論 (idéalisme) の起源である。つまり、最も実在的なものとは、我々の周囲にある物質的なものではなく、精神でしか到達できないより高次の実在である (プラ

トン主義の専門用語では、「知性的」なものとは「感覚的」なものより実在的である) と考えるあらゆる体系の起源である。

我々の内に愛を生じさせる美についても事情は全く同じで、我々が諸感覚によって知覚する美しいものどもは、我々の身体を使って捉えることのできない普遍的で永遠な一つの美の、空虚な、劣化した影でしかない。したがって真の愛は、感覚的な美によって始まっ

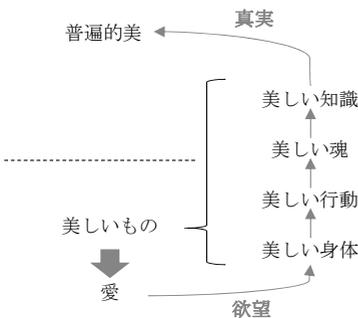


図3：美のイデア

たととしても、それらの美を超越し、それらが反映しているにすぎない知性的な美へと上昇しなければならない。愛についてのこの教えこそは、プラトンの『饗宴』でソクラテスが女預言者ディオティーマーから授けられたと言う教えである。一つの美しい肉体への愛から、多数の美しい肉体への愛へと移り、次に美しい行為の中に美を見出し、そこから美しい魂の美へ、美しい知識の美へ、そして最後に美そのもの、他のすべての美がその模写でしかない原初的な真の美へと上昇する<sup>4</sup>。このように、当初は美しい肉体を手に入れたいたいという性的欲望でしかない愛は、もはや感覚的ではなく知性的な美、美の真実である美へと向かう神秘的<sup>アナゴジック</sup>高揚の運動へと変質する。真実へと上昇するこの運動は、「弁証法」<sup>ディアレクティク</sup>の運動と完全に一致する。だからこそ愛と哲学は密接に関係するのである。ソクラテスが弁証法の達人として、自らを「愛のことがらにおける達人」と言うのは<sup>5</sup>、彼のことばの技術とエロティシズムが同じもの、すなわち真実を知ることを目指しているからである。

## II. ギリシアの新プラトン主義と実在の力学的構造としての愛

プラトンの死後、彼の学校アカデメイアは、懐疑主義、すなわち真実に到達する可能性の否定へと逆説的に進むことになる。イデア理論の教義上のプラトン主義が新たな展開を経験するまでには約五世紀も待たねばならない。紀元三世紀のローマで哲学者プロティノスがもたらした教説を皮切りにそれは始まった。プロティノスはいわゆる「新プラトン主義」の創始者と見なされているが、新プラトン主義者らは、自らを革新者でも新たな哲学の創始者でもない、単なる「プラトン主義者」すなわちプラトンの忠実な解釈者と考えていた。新生プラトン主義は、三世紀から六世紀にかけて、ローマからアテナイ、アレキサンドリアを経てシリアへといたる古代末期のギリシア哲学の主流となった。プロティノスによって示され、次いでポルピュリオス、イアンプリコス、プロクロス、ダマスキオス、そしてシンプリキオスのような新プラトン主義者らにより展開されたプラトンの解釈は、実在の構造の体系化の企てをその特徴とする。プラトンにおいては、感覚的なものと知性的なものは二項対立の関係にあり、前者は後者に依存するが、たとえば愛の場合において

<sup>4</sup> 210a-212a.

<sup>5</sup> 先の脚註3を参照。

は、美しい肉体から美そのものへと導く神秘的<sup>アナゴジック</sup>高揚の運動が、いつ感覚的なものと知性的なものの境界を越えるのかを正確に見極めるのは難しい。それは美しい行為を愛し始める時なのか（しかし行為は見えるものである）、あるいはむしろ、美しい魂や美しい知識を愛し始める時なのか。

新プラトン主義者らにおいては、それらの境界は明確化され、体系は複雑化する。すべての存在は、二つではなく三つの階層化されたレベルまたは「実体 hypostase」（「存在」を意味する新プラトン主義の専門用語）に分けられる。それ

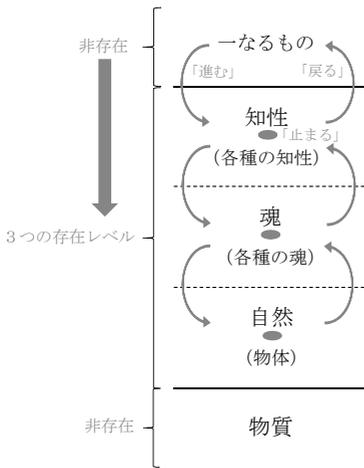


図4：新プラトン主義の体系

らを上から下の順に言うなら、知性、魂、そして自然である。下位のレベルは最も理解しやすい。自然は我々の周囲にある物体で構成される。それは我々がその中で生きているところの感覚的な世界である。中間のレベルである魂には、あらゆる魂が集まっている。人間の魂だけでなく、神々の魂、人間と神々の中間的な存在であるダイモーンの魂、世界の魂もある（古代哲学のあるものは、世界を巨大な生き物と考えていた）。さらに、上位のレベル、知性のそれは、知性的存在、すなわちイデアを思考することを特徴とする精神から構成される。

このレベルは、したがって、プラトンの知性的なもののレベルに対応するが、知性的なものは、絶え間なく永遠にそれらを思考する精神の内容と見なされる。そこに魂と知性の大きな違いがある。魂は常に時間の内で思考し、合理的な思考により真実へと少しずつ近づかねばならないのに対して、知性は知性的なものを瞬間的に捉えるので、常に真実を持っている。

この階層的な体系は、それら三つの存在レベルの上と下が、それぞれ一なるものと物質という非存在レベルに挟まれているだけにますます複雑である。全存在を超越する一なるものは、それら全存在の根源である。単一性（その内に部分はない）と唯一性（一なるものは一つしかない）を特徴とするそれは、まず知性、次に魂、その次に自然というように、そこから順々に派生するすべての存在の原因である。

一なるものは存在を超えており、ゆえに厳密には存在しないというのは、ギリシア新プラトン主義の最も奇抜な思想の一つであるが、単一性と根源の観念に厳密な論理学を適用することでよく理解できる。というのも、仮に一なるものが存在するとしたら、一なるものであることに加えて、存在する何かであらねばならなくなり、一なるものと存在するものという二つのものであることになるだろうが、そのことは単一性と矛盾するので、ゆえに単一であり続けるためには、それが存在しないこと、すなわち、新プラトン主義者らが言うように、「存在のかなたに」あることが必要である。一なるものが存在を超越することは、根源というその態様からくる必然でもある。なぜなら、存在の源である一なるものそれ自身が存在の一部をなすとしたら、一なるものの存在の根源を探さねばならず、そうして根源の根源を無限に探さねばならなくなるだろうから。それゆえ、一なるものが存在の出自の説明を真に可能にするためには、一なるものが存在の外側にあること、ゆえに存在しないことが必要になる。階層の上方で存在を超えて存在を生み出すこの非在とは対称的に、下方にはもう一つの非在、物質がある。物質は存在ではなく、諸存在の単なる入れ物（プラトンが*chôra*と呼ぶ）である。

新プラトン主義の体系は、階層化された諸レベルに切り分けられ、互いにはっきり分離しているので、實在の全体を、分割された静的な仕方できているように見えるかもしれない。しかし実は全くそうではない。なぜなら、實在のそれぞれのレベルは、三段階で行われる運動によって互いに結びついているからである。第一に、それぞれのレベルは上位のレベルから流れ出るので、万物の根源たる一なるものは、まず知性を、次に知性を介して魂を、さらに魂を介して自然を生み出す。この産出の運動は、「発出」と呼ばれるが、この言葉は、一なるものの創造力がそれ自身の外側にあふれ出し、一段また一段と進んでゆくさまを表す。しかし、何かが生み出されるためには、この力は前に進むことをやめ、停止して、何かを生み出さねばならない。これが第二段階で、「停止」を意味するギリシア語 *stasis* と呼ばれる。さらに第三段階では、新プラトン主義によれば、あらゆるものがその根源へと回帰すること、すなわち、自らの出所であるより高いレベルへと回帰し、それを介して、一なるものへと回帰することを欲する。

この回帰は「回向」と呼ばれるが、その逐語的な意味は、後ろを振り返ることである。プラトン主義の伝統において、欲望は、実存のより高いレベルを目指す垂直

の方向性を持つ。しかしプラトンにおける愛が、弁証法の神秘的な高揚に対応する真実への回帰に導くという意味において、基本的に教育的な側面を持つのに対して、新プラトン主義では、愛は形而上学的な力、つまり実在の構造を組織する力となる。あらゆるレベルの存在を自らの内から次々に下降させる一なるものが生み出す力とは対称的に、愛とは、あらゆるものがその根源から離れたことで被った喪失を埋め合わせたいと欲する回帰の力である。実在の力学的構造において、愛は、各レベルをより高い諸レベルへ、そしてそれらの共通の根源である一なるものへと結びつける力である。

### Ⅲ. フィチーノによる愛、あるいはキリスト教とプラトン主義の融合

マルシリオ・フィチーノと彼がフィレンツェで再現したアカデメイアは、古代のプラトン主義すなわちプラトンと古代後期の新プラトン主義者らによるプラトン解釈を、キリスト教と総合したことで知られている。この融合は、愛の理論の中にも見出されるが、その重要性をよく理解するためにも、まずは異教というギリシア新プラトン主義の文化的側面、すなわち古代ギリシア多神教への愛着を指摘しておく必要がある。すでに見たとおり、新プラトン主義は、アリストテレス哲学、ストア哲学、エピクロス主義、あるいは懐疑主義などの対抗する哲学学派を押しつけて、古代後期の哲学の主流となった。しかし強調すべきは、主流を占めたとはいえ、それはキリスト教の普及により次第に周縁化した少数派の中でしかないことである。紀元三世以降の新プラトン主義の発展は、キリスト教が地中海沿岸の支配的宗教、さらにローマ帝国の国教となる時期にちょうど重なっている。この新しい宗教を前に、新プラトン主義の哲学者らは、保守的な態度を取った。古代ギリシアの文化とオリンポスの神々の宗教に忠実だった彼らは、プラトンの哲学を、多神教の合理的な神学として解釈し、その論理の厳格さと徹底した体系性で、信仰の基礎に奇蹟と秘儀を置くキリスト教徒の非理性的な信仰を滑稽化した。実際に新プラトン主義者らは、新しい宗教が次第に支配を握り、自分たちの大切なギリシア多神教文化が目の前でじわじわと消滅してゆくのを確認するしかなかっただけに、キリスト教に対する宗教闘争的な反発は辛辣さを極めた。

したがって、フィレンツェの新プラトン主義者らが行った、キリスト教と、本質的に反キリスト教的なギリシア新プラトン主義との総合は、容易ではなかったが、

それを可能にしたのは、異なる文化や多様な宗教や様々な学問を通じて同じ真実は啓示されるという確信だった。たとえキリスト教が真実の最も完全な啓示と考えられるとしても、同じ真実の他の側面が、古代の哲学者、ユダヤ教徒、イスラム教の哲学者や神学者、あるいは医者（マルシリオ・フィチーノも医者である）、占星術師、錬金術師、魔術師によって異なる仕方で述べられるのを見出す妨げにはならない。そのような諸説混合は、「キリスト教の」真実を、明らかに反キリスト教的な哲学の中に見出すことを可能にしたが、同時にそれはキリスト教徒の側にもう一つの難問を作りだしていた。というのも、ルネサンス期のイタリアで絶大な権力を持ったカトリック教会が、キリスト教の外に真実があるという考えを疑わしく思わないはずはなく、それが敵側のことであればなおさらだった。ところで、この時代にローマカトリック教会が定める正統な教理に合致しない理論を主張すれば、異端として厳罰に処せられるか死刑になる危険があった。カトリック教会の不寛容に直面したルネサンス期の新プラトン主義哲学者らは、極度の慎重さをもって、自分たちが使った多神教の理論を可能なかぎりキリスト教化しなければならなかった。

そのようなわけで、マルシリオ・フィチーノがプラトン『饗宴』の注釈において提示する愛の理論は、五段階の現実の階層構造をもつ新プラトン主義の形而上学に合致するが、若干の調整がこの異教の体系にキリスト教的な外観を与えている。いくつかの調整は、たとえば第一の根源を一なるものではなく神と呼んだり、知性を天使と呼んだりすることのように、用語に関するもので、それにより、知性の多数性のために生じかねない多神教の疑いを回避している。他の変更は教義の根底に関わるもので、なかでも重要なのは、すべてのレベルを存在の領域に統合したことである。キリスト教は神の存在を信じることに基礎を置いているので、神と同一視される第一の根源を存在の外にあると見なすことはもはやできない。そうした調整は戦略的なものであるが、それだけではない。たしかにカ



図5：フィチーノの体系

トリック教会に疑念をもたせない、しかし古代哲学に強い読者なら解読できるような（「天使」と書かれているのは、「知性」を意味する一種の暗号である）キリスト教化された言葉を練る必要がある。しかし同時に、単なるキリスト教化された言葉遣いではなく、新プラトン主義の体系そのものもキリスト教化されているという意味で、哲学の真の総合がそこにはある。しかもこの種の総合には、古代の先例もある。五世紀の新プラトン主義哲学者プロクロスの子であるキリスト教徒が、ディオニュシオス・アレオパギテースの名の下に、新プラトン主義の体系を天使の階層あるいはカトリック教会の構造に適用した神学論を書いていた。マルシリオ・フィチーノはこの偽=ディオニュシオスの著作を翻訳し、下に見るとおり、『饗宴』注解の中でそれを引用している。

フィチーノにおいても、古代後期ギリシアの新プラトン主義者らにおけるのと同様に、愛とは、第一の根源と存在の諸レベルの間での発出と回向の運動に関係する形而上学的な力である。

その至高の創造主（=神）は、第一に万物を創り、第二にそれらを自らの方へ引き寄せ、第三にそれらを完全なものとする。同様に、万物はまず、生まれると同時にあの絶えることのない泉から流れ出し、ついで自分たちの起源を探してその同じ泉へと逆流し、最後に、自分たちの根源へと回帰した後で完全なものとされる。ゆえに、プラトンにおいてはよく言われるとおり、この世界の王のことを「善であり美であり義である」と呼ぶことができる。創造するから「善」、惹きつけるから「美」、完全に作るから「義」なのである。したがって惹きつけることをその特性とする美は、善と義の間に位置することとなる。美は善から流れ出し、義を目指して逆流するのである。<sup>6</sup>

全実在は三段階からなる力学にしたがって組織される。それにおいて神は、諸存在を自らの外へと投げだし、次にそれらの運動を自らへと回帰する運動に反転させ、最後にそれらを新たに自らの内に迎え入れる。この運動の三つの段階には、神の三つの属性が対応する。すなわち、諸存在を惜しみなく生み出す善、それらを惹

<sup>6</sup> マルシリオ・フィチーノ『プラトンの『饗宴』注解』、第二書、第一章。

きつける美、救いと埋め合わせとしての義——埋め合わせとは、存在するために自らの根源から離れることで各存在が被った喪失のそれである。この構造の中で、神の美によって引き起こされた愛は、神から発して神へと戻るサイクルの中間点に一致する。

この神の美が、万物の内に愛、すなわち神の美への希求を生み出す。神が世界を自らの方へと運び、世界もまた神の方へと運ばれるのは、絶えず惹きつける力が一つしかないからである。この力は神から出て、世界をつらぬき、神へと至り、円を描くように出発点へと戻ってゆく。このような、神から世界へ世界から神へとめぐる円は、唯一で同一でありながら三つの名前で呼ばれる。神の内でも始まり惹きつけるので「美」、世界をつらぬき世界を神へと運ぶので「愛」、創造主へと回帰し創造主により創造されたものを創造主に合一させるので「悦楽」と。ゆえに愛は、美から始まり悦楽に終わる。このことこそ、ヒエロテスとディオニュシオス・アレオパギテスの有名な讃歌の意味するところである。その中で、この神学者たちは、次のように歌っている。「愛は善の円、善から善へと終わりなく回り続ける。」<sup>7</sup>

ここでマルシリオ・フィチーノは、循環運動の単一性を強調している。たしかにそれは三つの段階を含むが、途切れることがないので、中間点である愛は、事実上、サイクルの全体を指し示すことができる。愛は、神から来て愛を生じさせる美によって最初の段階と、神に再会して喜びを生じさせる第三の段階とに、不可分に結びついているからである。偽=ディオニュシオスの引用で、善が第一の根源すなわち神を指示していることが、愛と、実在を組織する力学的サイクル全体の同等性を証明している。悦楽 (*voluptas*) が言及されていることは、この形而上学がエロスのなものをたしかに含むことを強調する。とはいえ、このエロスのなものはまるごと神へと差し向けられている。

美とは神から来て万物へと浸透していく作用あるいは光で、第一に天使の知

<sup>7</sup> 同書、第二書、第二章。偽=ディオニュシオスの引用は、『神名論』IV, 17.

性へ、第二に世界の魂とその他すべての魂へ、第三に自然へ、第四に物体の物質へと浸透する。ちょうど太陽の唯一の光が四元素すなわち火、空気、水、土を照らすのと同じように、神の唯一の光は、知性、魂、自然、物質を照らす。そして、四元素の中に光を見るとき、人は太陽から発する光を感じ取って、上方の太陽の光の観想へと向かってゆくと同じように、知性、魂、自然、物体という四つのレベルにある美を観想し愛するとき、人は神の光輝く美を観想し愛するのであり、その光輝く美をとおして神自身を観想し愛するのである。<sup>8</sup>

光と神の美の類比は、下に向かう場合は神の美が万物に行き渡ることを示すのに用いられ、上に向かう場合は万物の美を神に送り届けるのに用いられる。同様に、四元素（火、空気、水、土）と存在の下位四レベル（知性、魂、自然、物体）の類比は、次のことを証明する。すなわち、物体の中で知覚される光がそれらの物体の内で見られた太陽の光にすぎないのと同様に、物質、自然、魂、知性（あるいは天使）のレベルで愛されたすべての美は神の美であるから、いかなる愛であれ、つまるところ神への愛であるということである。神への愛以外のどんな愛も、それ自体としては否定され、神への愛に帰されるように見える以上、プラトン主義の愛の理論は完全にキリスト教化されたように思われる。しかし、この否定的な解釈に、より肯定的なもう一つの解釈を対置することができる。神への愛は、下位の諸存在に向かう愛を否定するよりもむしろそのすべての愛に根拠をあたえるという解釈である。フィチーノにおいては、これら二つの解釈は矛盾に見えるどころか、同時に認められ、互いに互いから推論されるのである。

我々はただ神のみを愛する。物体や魂や天使を愛するとしても、我々はそれら自身ではなく、それらの内にある神を愛する。すなわち、物体の内にある神の影を、魂の内にある神の似姿を、天使の内にある神の面影を愛するのである。このように、今や我々は、万物の内にある神を愛し、最終的には神の内にある万物を愛することになろう。そのように生きることで我々は、神と神の内にある万物を見て、神自身と神の内にあるあらゆるものを愛するに至るまで進歩するだろう<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 同書、第二書、第五章。

この一節は、神への愛以外のすべての愛を全否定するところから始まる。何を愛そうとも、愛されているのは常に神であり、神のみであるが、その神は、存在の階層を下りてゆくにしたがい、徐々に不完全な仕方であらざるようになる。物体への愛も、そこで神の美の光がすっかり翳っていたとしても、それゆえ神への愛なのである。しかしながら、次の箇所では方向変換が行われて、「あらゆるものの内にある」この神への愛は、我々が「神の内にあるあらゆるものを愛する」ように導くと明言される。要するに、下位の存在に対する愛は、神への愛に還元されることで否定されるどころか、それにより正当化される。言い換えるなら、我々の周囲にある物体を含め、神から来る不完全な存在を愛する我々は正しい。なぜなら、たとえその美の反映の鮮やかさに度合いの差があるとしても、すべては神の美を反映しているのだから。そのように神への愛と下位の存在への愛が折り合ったところで、この箇所の最終行は締めくくられている。

イタリアルネサンスの文脈と関係づけるなら、この折り合いを、当時の美学が置かれていた哲学的な状況として理解することができる。キリスト教の影響が行き渡っていたとはいえ、ルネサンス文化が身体美に魅惑されていたことはよく知られている。絵画、彫刻、建築のみならず、植物学、医学、あるいは機械学さえもが身体のさまざまな美を熱心に探究し、それらを植物、動物、機械、そしてもちろん人間の身体の内にも見出した。語源的な意味で、「感覚的なものの学問」としてのこの美学 (esthétique) は、明らかに古代文化への回帰によって培われたが、哲学の次元でも、マルシリオ・フィチーノの『饗宴』注解の中に同じ動きが見出される。古代ギリシアの耽美主義において、愛は社会的規範の一部をなす同性愛的エロティシズムに依存していたが、キリスト教の禁欲主義は性愛の価値を否定することで、同性愛であればそれを断罪しようとしたし、異性愛ならそれを制限しようとした。フィチーノがそれほどに對立する二つのものを総合できたのは、新プラトン主義のおかげである。プラトニックな愛を、性愛を奪われた愛として、つまりキリスト教禁欲主義によって性愛を切り取られたギリシア的愛として、否定的に見ることが出来る。しかし同じプラトニックな愛は、新プラトン主義の形而上学が可能にした、ただひとりの神から、物体をも含むすべての存在へのキリスト教的愛の拡大でもあ

<sup>9</sup> 同書、第六書、第一九章。

る。要するに、プラトニックな愛とは、性愛の禁欲であるのと同程度に、精神的愛のエロス化なのである。

## 結論

マルシリオ・フィチーノが理論化したプラトニックな愛とは、性道徳論ではない。それは古代後期の新プラトン主義哲学者らから取り入れた形而上学に、彼らが厳しく批判したキリスト教を逆説的に結び合わせたものに属している。新プラトン主義とキリスト教のそのような縁組みを可能にしたのは、ニーチェが皮肉を込めて観念論の「背後世界」と名づけることになるものへの信念、すなわちプラトン主義が感覚世界の背後に仮定する上位の实在、あるいはキリスト教が地上の物質的な世界に対置する天上の精神的世界への信念である。プラトニックな愛における性愛の排除は、我々が生きる世界とは別の、より実在的な、この世界の価値を失わせるような世界への信念と切り離せない。しかしこのもう一つの世界は、歴史的に言うなら、瓦解してしまった。デカルトのタブラ・ラサの方法、次いで啓蒙期の合理主義が、新プラトン主義の形而上学的空論を一掃し、哲学をキリスト教神学と区別した。プラトニックな愛は、それが依存する哲学的世界がもはや存在しない以上、厳密な意味では、もはや存在し得ない。だが、プラトニックな愛の理論が教えているのはまさに、我々の愛し方は、それが性的であろうとなかろうと、我々の世界観に依存するということである。愛は依然として性愛抜きで生きられる。それに日本では今日、セックスレスの生活様式が増加傾向にあるということが多数のアンケートにより明らかにされている。しかし、「プラトニック」な愛を時代錯誤的に話題にするよりも、セックスレスのそうした生活様式を可能にする世界観を問題にするべきである。つまり、今日、性行為を排除する人々は、いかなる背後世界を生きているのか、という問題である。

Jocelyn Groisard, « Marsile Ficin et l'amour  
platonique/(néo-)platonicien »  
訳 = 藤原真実 (首都大学東京教授)